ISSN 2189-1516

薬のチェック 101

Vol. 22
May 2022

101 号（2022 年５月発行）の記事要旨と参考文献

参考文献はアクセスが容易になるように、できる限りネットへのリンクをつけたものにしています
（特に PubMed アブストラクトへリンクできるよう）

創刊 100 号
記念企画

2022 年版 使ってはいけないクスリ 2

より良い薬物療法のために

COVID-19ワクチン　接種後心筋炎死亡率20～30代で上昇

■ CONTENTS ■

Editorial

ワクチン依存では感染は終息しない　55

創刊 100 号記念企画
2022 年版　使ってはいけないクスリ②　56

主な使ってはいけないクスリの一覧　56
糖尿病用剤　58
呼吸器用剤　60
皮膚用剤　63
アレルギー用剤　65
眼科用剤　66

害 反 応

ニキビ用剤：アダパレン（ディフェリンゲル® など）　67
セロトニン系抗うつ剤：分娩後異常出血　68

COVID-19 情報

心筋炎による死亡率が特に 20 ～ 30 代で上昇　70

Others

薬剤師国家試験に挑戦しよう！（問題）　62
医薬品危険性情報　73
薬剤師国家試験に挑戦しよう！（解答と解説）　74
FORUM　次世代につなげたい「薬の安全」タミフルの効き目に感動したが自分の体と向き合う　74
コーヒー無礼区　75
次号予告／編集後記　76

表紙のことば：**小学生の時に買ってもらった、思い出のレトロな顕微鏡。今でも十分使えます。**

編集部から

5歳から11歳に対するCOVID-19用ワクチン接種は2022年（令和4年）1月21日の承認後に開始され、努力義務の規定は適用されていないものの、4月6日時点で接種率は8.0%、すでに59万34人の子どもが1回以上接種しています。主要メディアでは相変わらず子どもへのワクチン接種を勧めるような偏った報道をしていますが、徐々にワクチンの問題点や害について国民が知る状況となってきていると感じています。少数ですが、複数の自治体でワクチンの接種券の一律送付を中止し、住民にワクチン接種について十分考えてもらい、接種希望者には申請してもらう対応をとるようになっています。また名古屋市では「なごや新型コロナウイルスワクチン長期的な副反応相談窓口」を設置し、接種後の長期的な副反応が疑われる症状のある市民に対する電話相談窓口を始めました。

本誌ではCOVID-19用ワクチンの有効性と安全性には非常に問題があり、特に、重症化リスクの低い若年者においては、心筋炎など心疾患系の害反応が重篤であり、接種をすべきではないと分析しています。本誌読者の中にも、ワクチンは有効で多少の害は容認すべき、という同調圧力の中、ご家族や知人に本誌の内容を伝えたいけど伝えられないという方もいると思いますが、徐々に同調圧力は低くなってきています。是非、本誌の内容を周囲の方々に伝え、ワクチンについての適切な情報を共有していただけることを切に願っています。

★本誌の記事では執筆者に相当するのが薬のチェック編集委員会です。たたき台ないしは初稿の担当者を決めて、その原稿を編集委員で回覧します。時にはアドバイザーにも依頼し、諸々の疑問や加筆・削除・修正などを経て完成稿になります。いわゆる個人の原稿は、例えば（き）として区別しています。

p55 Editorial Free https://www.npojip.org/chk_tip101-Editorial.pdf

ワクチン依存では感染は終息しない

2022年版
使ってはいけないクスリ　②

本誌100 号記念特集「使ってはいけないクスリ」の続編です。100 号では、循環器系の薬剤(降圧剤、コレステロール低下剤、狭心症用剤、心不全用剤、利尿剤)、感染症用剤 (抗生剤、抗ウイルス剤)、神経系用剤 (認知症、パーキンソン病)、痛み関連剤 (リウマチ、抗炎症鎮痛剤、筋弛緩剤、片頭痛、骨粗しょう症)、泌尿器科用剤、禁煙用剤、やせグスリを取り上げました。

今号では、糖尿病用剤、呼吸器用剤(去痰剤、鎮咳剤、血管収縮剤、β作動剤、吸入ステロイド剤、その他喘息用剤)、皮膚･アレルギー用剤などについて解説します。

次の102 号では、消化器用剤(抗潰瘍剤、制吐剤、便秘用剤、下痢止め)、精神関連剤(抗うつ剤、抗不安剤、睡眠剤)、内分泌(性ホルモン剤)などを取り上げます。

特集の読み方

前号と同様、各薬効別に、関連する病気の基本的治療について述べたうえで、その薬剤をなぜ使ってはいけないのか、理由を簡単に述べます。詳しい理由は、各薬剤の記述の末尾などに、参照してほしい本誌や書籍名の略称と号数(頁)を示しています。

本誌(薬のチェックは命のチェック:2001 年1月創刊、薬のチェックTIP:2015 年リニューアル、薬のチェック:2019 年以降)は「チェック○号」と略し、TIP 誌は「TIP ○年○月」、薬のチェックインターネット速報版は、「速報○号」、第1回医薬ビジランスセミナー報告集は「報告集○頁」で示します。また、Prescrire International 誌は「PI ○号」、浜六郎著の飲んではいけない薬大事典は「大事典○頁」です。

説明文では、先に一般名を、( )内に(○○○R)と商品名を示します。® は商標を示す記号です。

2022 年版　使ってはいけないクスリ 2

表：主な使ってはいけないクスリの一覧　（詳しくは本文をお読みください）

適応や効能・効果	一般名など	商品名	本文頁
糖尿病用剤			58
SU 剤	グリクラジド、グリベンクラミド、他５剤	グリミクロン、オイグルコンなど	58
SU 剤類似剤（グリニド剤）	ナテグリニド、ミチグリニド、他１剤	スターシス、グルファストなど	58
グリタゾン剤（チアゾリジン剤）	ピオグリタゾン	アクトスなど	58
インクレチン関連剤 (1) DPP-4 阻害剤（グリプチン剤）	シタグリプチン、 ビルダグリプチン、他９剤	グラクティブ、 エクア　など	59
インクレチン関連剤 (2) GLP-1 受容体作動剤	リラグルチド、 エキセナチド、他３剤	ビクトーザ、バイエッタ、 ビデュリオンなど	59
アルドース還元酵素阻害剤	エパルレスタット	キネダックなど	59
α - グルコシダーゼ阻害剤	アカルボース、ボグリボース、他１剤	グルコバイ、ベイスンなど	59
ビグアナイド剤	イメグリミン、ブホルミン	ツイミーグ、ジベトス	59
SGLT-2 阻害剤	エンパグリフロジン、 カナグリフロジン、他４剤	ジャディアンス、トラディアンス配合錠、カナグル、カナリア配合錠	59

適応や効能・効果	一般名など	商品名	本文頁
呼吸器用剤			60
気管支拡張剤 アドレナリンβ作動剤	イソプレナリン フェノテロール サルメテロール	アスプール液、プロタノール錠、注など ベロテックエロゾルなど セレベント吸入、アドエア吸入	60
吸入ステロイド剤	フルチカゾン 同＋サルメテロール 同＋ホルモテロール 同＋ビランテロール	フルタイド吸入、フルナーゼ点鼻 アドエア吸入 フルティフォーム吸入、 レルベア吸入	61
鼻づまりどめ・咳止め エフェドリン系薬剤	メチルエフェドリン、 エフェドリン プソイドエフェドリン	セキコデ、カフコデ、コンタック、 など、たいていの咳止め、鼻水止め の配合剤の成分として入っている。	61
鼻づまりどめ（ナファゾリン剤）	ナファゾリン	プリビナ液	61
去痰剤 アンブロキソール剤 カルボシステイン	アンブロキソール ブロムヘキシン カルボシステイン	ムコソルバンなど ビソルボンなど ムコダインなど	62
中枢系鎮咳剤	ペントキシベリン	ペントキシベリン	62
皮膚用剤			63
アトピー皮膚炎用免疫抑制剤 (1) カルシニューリン阻害剤	タクロリムス ピメクロリムス シクロスポリン	プロトピック軟膏 ピメクロリムスクリーム ネオーラル（カプセル）	63
アトピー皮膚炎用免疫抑制剤 (2) JAK 阻害剤	バリシチニブ ウパダシチニブ アブロシチニブ デルゴシチニブ	オルミエント錠 リンヴォック錠 サイバインコ錠 コレクチム軟膏	63
ニキビ用レチノイド剤	アダパレン 同 + 過酸化ベンゾイル	ディフェリンゲル エピデュオゲル	64
熱傷用剤（抗菌剤）	スルファジアジン銀	ゲーベンクリーム	64
男性型脱毛用剤 5 - α還元酵素阻害剤	デュタリステリド フィナステリド	ザガーロカプセル プロペシア錠	64
アレルギー用剤			65
第 1 世代抗ヒスタミン剤	シプロヘプタジン ヒドロキシジン プロメタジン	ペリアクチンなど アタラックス、アタラックス P ピレチア、ヒベルナ、小児用 PL 顆粒	65
第 2 世代抗ヒスタミン剤	オキサトミド	オキサトミド	65
抗ヒスタミン剤＋ステロイド剤	クロルフェニラミン＋ベタメタゾン	セレスタミン	
皮膚炎用 NSAIDs 外用剤	スプロフェン、他 1 剤	スルプロチン	66
その他の抗アレルギー剤	トラニラスト スプラタスト ペミロラスト ラマトロバン	リザベン アイピーディー アレギサール バイナス	66
ロイコトリエン受容体拮抗剤(検討中)	モンテルカスト プランルカスト	キプレス、シングレア オノンなど	66
眼科用剤			66
カルシニューリン阻害剤	シクロスポリン点眼剤	パピロックミニ点眼液 0.1% *	66

* インターネット上では、「ドライアイ」への使用を勧める宣伝が多いが、それに使ってはいけない。

参考文献
呼吸器用剤
1) Mahieu LM et al. Imidazoline intoxication in children. Eur J Pediatr. 1993 Nov;152(11):944-6. doi: 10.1007/BF01957538.PMID: 8276031
2) Ramey JT et al. Rhinitis Medicamentosa. J Investig Allergol Clin Immunol. 2006;16(3):148-55.PMID: 16784007
3) Mallet P et al. Respiratory paradoxical adverse drug reactions associated with acetylcysteine and carbocysteine systemic use in paediatric patients: a national survey. PLoS One. 2011;6(7):e22792

p67

害反応

ニキビ用剤:アダパレン(ディフェリン®ゲルなど)

胎児異常あり、使ってはいけない

薬のチェック編集委員会

●アダパレン剤(ディフェリン®ゲルなど)は外用のレチノイド剤です。形成異常(「奇形」改め)が報告されており、妊娠中(可能性も含めて)は禁忌です。
●それでも相変わらず形成異常や、外形異常のない精神神経発達障害が認められています。
●ニキビという良性の病気に比べてこれらの害は重篤すぎますし、注意していても防止できていません。

結論：使ってはいけません。

キーワード：レチノイド、形成異常、奇形、精神神経発達障害、妊娠、

参考文献
1)Prescrire team. Isotretinoin: too many pregnancies still at risk. Prescrire Int: https://english.prescrire.org/en/81/168/64265/0/NewsDetails.aspx (April 2022)
2) Prescrire team. Birth defect due to topical retinoids Prescrire Int 1998：7(37): 148-149
3) Prescrire team.Topical retinoid during pregnancy. Prescrire Int 2005: 14(77): 100-101
4) Autret E et al. Anophthalmia and agenesis of optic chiasma associated with adapalene gel in early pregnancy. Lancet 1997: 350: 339. DOI: 10.1016/S0140-6736(05)63390-9 PMID: 9251645
5) Selcen D et al. Otocerebral anomalies associated with topical tretinoin use. Brain Dev 2000; 22 (4): 218-220. DOI: 10.1016/s0387-7604(00)00104-2 PMID: 10838106
6) Navarre-Belhassen C et al. Multiple congenital malformations associated with topical tretinoin. Ann Pharmacother 1998; 32 (4): 505-506. DOI: 10.1345/aph.17138 PMID: 9562150
7) Colley SM et al. Topical tretinoin and fetal malformations. Med J Aust 1998; 168 (9): 467. doi: 10.5694/j.1326-5377.1998.tb139031.x. PMID: 9612461
8) Prescrire team. Isotretinoin: developmental neuropsychiatric disorders, without visible malformations at birth. Prescrire Int: 31(236): 103-104

p68-69

害反応

セロトニン系抗うつ剤:分娩後異常出血

まとめ（Prescrire誌と本誌解説を総合）
●セロトニン再取り込み阻害剤(SRI)などセロトニン系抗うつ剤は分娩後異常出血などの出血のリスクを高める。
●分娩後異常出血は、妊産婦死亡の主な原因であり、深刻な害作用であるため、妊娠中に使用する際には、リスクを考慮しなければならない。
●うつ病に対する薬物治療はそれほど有効ではない。
●胎児への影響、母胎への産後出血の害、新生児の呼吸窮迫や痙攣など神経毒性、離脱症状、遷延性肺高血圧、子の生涯にわたる精神神経障害など害は著しい。
●したがって、これらの害にも関わらず、セロトニン系抗うつ剤の使用が正当であるとみなされる状況は考え難い。基本的に、対人関係療法(IPT) や認知行動療法(CBT) などの非薬物療法で対処すべきと考える。

Prescrire Int.232 p295-296 翻訳と解説は本誌

参考文献

Prescrire誌引用文献

1) Prescrire Editorial Staff "SSRI antidepressants: postpartum haemorrhage" Prescrire 1nt 2014; 23(151): 186.
2) Prescrire Redaction "Antidepressaeurs inhibiteurs dits selectifs de la recapture de Ia serotonine (IRS): fluoxetine, etc” Interactions Medicamenteuses Prescrire 2021.
3) Palmsten K et al. "Patterns of prenatal antidepressant exposure and risk of preeclampsia and postpartum haemorrhage" Paediatr Perinat Epidemiol 2020; 34(5): 597-606 + supplementary material: 4 pages
4) Skalkidou A et al. "SSRI use during pregnancy and risk for postpartum haemorrhage: a national register-based cohort study in Sweden" BJOG 2020; 127 (11): 1366-1373
5) Huybrechts KF et al. "Maternal and fetal outcomes following exposure to duloxetine in pregnancy: cohort study" BMJ 2020; 368: m237, 11 pages.
6) Heller HM et al. "Increased postpartum haemorrhage, the possible relation with serotonergic and other psychopharmacological drugs: a matched cohort study" BMC Pregnancy Childbirth 2017; 17 (1): 166.
7) Prescrire Redaction "Duloxtine: hemorragies de la delivrance" Rev Prescrire 2020; 40(436): 111.
8) EMA" PRAC recommendations on signals -Adopted at the 28 September- 1 October 2020 PRAC meeting - Citalopram; desvenlafaxine; escitalopram; fluoxetine; fluvoxamine; milnacipran; paroxetine; sertraline; venlafaxine; vortioxetine - Postpartum haemorrhage" 26 October 2020: 8 pages
9) Gadot Y et al. "The use of antidepressants in pregnancy: focus on maternal risks" J Obstet Gynaecol Can 2015; 37 (1): 56-63
10) David DJ and Gardier AM "Les bases de pharmacologie fondamentale du systeme serotoninergique: application a la reponse antidepressive" Encephale 2016; 42 (3): 255-263.
11) Gachet C " Les mecanismes molculaires de l'activation plaquettaire" Bull Acad Natl Med 2013; 197 (2): 361-373
12) Jiang HY et al. "Antidepressant use during pregnancy and risk of postpartum hemorrhage: a systematic review and meta-analysis" J Psychiatr Res 20l6;83: 160-167
13) Belfort MA et al. "Overview of postpartum hemorrhage" Up to Date www.uptodate.com accessed 11 April

2021: 8 pages
14) INSERM Sante publique France "Les morts maternelles en France: mieux comprendre pour mieux prevenir. 6eme rapport de l'enquete nationale confidentielle sur les morts maternelles (ENCMM) 2013-2015" January2021: 237 pages
15) Prescrire Editorial Staff "SSRI antidepressants in utero: pulmonary hypertension" Prescrire Int 2014; 23(154):268.
16) Prescrire Editorial Staff "SSRI antidepressants and pregnancy: long-term neuropsychiatric disorders in exposed children? (continued)" Prescrire Int 2021; 30 (222): 16-18

Prescrire誌囲み記事引用文献

1) 'Postpartum haemorrhage" + "Nonsteroidal anti-inflammatory drugs" + "Aspirin" + "Benzylpenicillin" + "Valproate". In: "Martindale The Complete Drug Reference" The Pharmaceutical Press, London. www.medicinescomplete.com accessed 10 July 2021: 140 pages.
2) Belfort MA et al. "Overview of postpartum hemorrhage" UploDate. ww.uptodate.com accessed 10 July 2021: 31 pages.
3) Belfort MA et al. "Secondary (late) postpartum hemorrhage" UpToDate. www.uptodate.com accessed 10 July 2021 6 pages.
4) Prescrire Redaction "Hemorragies du post-partum d'origine medicamenteuse" Rev Prescrire 2021; 41(455): 669-673.

本誌解説引用文献

a) Bennett HA et al. Prevalence of depression during pregnancy: systematic review. Obstet Gynecol. 2004 Apr;103(4):698-709. doi: 10.1097/01.AOG.0000116689.75396.5f. PMID: 15051562
b) Milgrom J et al. Antenatal risk factors for postnatal depression: a large prospective study. J Affect Disord. 2008 May;108(1-2):147-57. doi: 10.1016/j.jad.2007.10.014. PMID: 18067974
c)Healy D. Mangin D. Safety of Antidepressants in Pregnancy With Particular Reference of Paroxetine (Paxil)（訳）妊娠中における抗うつ剤の安全性：特にパロキセチン（パキシル）について、TIP 誌 2009：24(8/9)：93- 102.
d)浜六郎、パロキセチン（パキシル）の生殖毒性に関する調査研究—胎児・新生児への毒性，とくに新生児離脱症候群および新生児持続性肺高血圧症について—TIP 誌 2009：24(10)：125-132.

p70-72

COVID-19 情報

COVID-19ワクチン

心筋炎による死亡率が特に20 ~30 代で上昇

●厚生労働省(厚労省) は、COVID-19 ワクチン接種後に心筋炎発症が認められることを公表し、添付文書にも記載しました。海外でも、接種後に若年男性を中心に心筋炎発生との関連が報告されています。今回、公表データを元にCOVID-19 ワクチンの心筋炎死亡との関連を調査しました。
●ワクチン接種後の心筋炎死亡率は、一般人口(2019 年人口) と比較して、有意に上昇していました。特に20 代、30 代では心筋炎死亡率がそれぞれ約21 倍、14 倍、疑い例を

含めるとそれぞれ35 倍、16 倍と著しく高率でした。40 代でも4.7 倍(疑い例を含めると5.9 倍)で有意でした。
●接種後死亡例の報告漏れや、接種者がふだん健康であること、死因が正確に診断されていない可能性(誤分類)などを考慮すると、ワクチン接種後の心筋炎死亡率はさらに高くなる可能性があります。

結論:COVID-19 ワクチンは、20 代～40 代では心筋炎による害が大きい

キーワード:人口動態統計、報告漏れ、健康者接種バイアス、病者除外バイアス、誤分類、情報バイアス、観察人年

参考文献

1) 首相官邸. 新型コロナワクチンについて(2022.2.20.アクセス) https://www.kantei.go.jp/jp/headline/kansensho/vaccine.html
2) Mevorach D, Anis E, Cedar N, et al. Myocarditis after BNT162b2 mRNA Vaccine against Covid-19 in Israel. N Engl J Med. 2021; 385(23):2140-2149.
3) Choi S, Lee S, Seo JW, et al. Myocarditis-induced Sudden Death after BNT162b2 mRNA COVID-19 Vaccination in Korea: Case Report Focusing on Histopathological Findings. J Korean Med Sci. 2021; 36(40):e286. Published 2021 Oct 18.
4) 厚生労働省. 新型コロナワクチン Q&A (2022.2.20 アクセス) https://www.cov19-vaccine.mhlw.go.jp/qa/0079.html
5) 第 76 回厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会副反応検討部会、令和 3 年度第 28 回薬事・食品衛生審議会薬事分科会医薬品等安全対策部会安全対策調査会(2022-2-18 合同開催)資料(2022.2.20 アクセス) https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000208910_00038.html
6) 人口動態統計 2019 年 死亡数, 死因(三桁基本分類)・性・年齢(5 歳階級)別 (2022.2.20 アクセス) https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450011&tstat=000001028897&cycle=7&year=20190&month=0&tclass1=000001053058&tclass2=000001053061&tclass3=000001053065&result_back=1&tclass4val=0_
7) 政府統計の総合窓口 人口推計 2019 年 10 月 1 日付人口推計(2022.2.20 アクセス) https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200524&tstat=000000090001&cycle=7&year=20190&month=0&tclass1=000001011679
8) 薬のチェック編集委員会. 出血性脳卒中死亡が女性で 4 人 2 度あることが 4 度, 強い因果関係あり. 薬のチェック速報版 No195.(2022.2.20 アクセス) https://npojip.org/sokuho/210426.html
9) 厚生労働省. 予防接種法に基づく医師等の報告のお願い(2022.2.20 アクセス) https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou20/hukuhannou_houkoku/index.html
10) 2021 年 5 月 9 日付読売新聞報道(2022 年 2 月 20 日アクセス) https://www.yomiuri.co.jp/medical/20210508-OYT1T50380/
11) CDC. Selected Adverse Events Reported after COVID-19 Vaccination (2022 年 3 月 6 日アクセス) https://www.cdc.gov/coronavirus/2019-ncov/vaccines/safety/adverse-events.html
12) 薬のチェック編集委員会.医学研究の方法 基本の「き」. 薬のチェック 2020; 92 付録. (2022 年 3 月 6 日アクセス) https://www.npojip.org/chk_tip/2020No92-furoku.pdf
13) ファーザーワクチン(コミナティ筋注)添付文書(2022.2.20 アクセス) https://www.kegg.jp/medicus-bin/japic_med?japic_code=00069248
14) モデルナワクチン(スパイクバックス筋注)添付文書(2022.2.20 アクセス) https://www.info.pmda.go.jp/go/pack/631341EA1038_1_02/
15) 薬のチェック編集委員会. COVID-19 ワクチン接種後の害と病者除外バイアス（健康者接種バイアス）の証拠. 薬のチェック速報版.No203（予定）
16) Kenneth J.Rothman 著. 矢野 栄二訳. ロスマンの疫学 科学的思考への誘い 2004 年 8 月 6 日発行 (ISBN4-88412-268-2) .p123-144
17) 薬のチェック編集委員会.ワクチン後に脳出血・血管病死が多発. 薬のチェック 2021; 96: 89-91. (2022 年 3 月 6 日アクセス) https://www.npojip.org/chk_tip/No96-f06.pdf

P73

- **抗がん剤アテゾリズマブによる硬化性胆管炎**
- **インフルエンザワクチン接種:副反応疑い報告**
- **手術補助剤アミノレブリン酸:光線過敏症**
- **COVID-19 ワクチンで若年者の心筋炎、心膜炎**

p74-76

FORUM

このコーナーでは、本誌の記事内容に関する疑問・質問・突っ込み、あるいは読者の声などにお答えします。

今回のＦＯＲＵＭは、読者のみなさまからお寄せいただいた感想を集めました。

★次世代につなげたい「薬の安全」

10 年程 (以上？) 前に、本誌の前身である「薬のチェックは命のチェック」の読者の声欄に投稿したことがあります。内容は、子どもには、高熱時に坐薬のアセトアミノフェンくらいしか使っていません、というものでした。

その子も成長し、今は、高校受験中の思春期まった

薬剤師国家試験に挑戦しよう（62 頁）の正解と解説

P75

★タミフルの効き目に感動したが

いつも拝読しております。最初は、浜医師がかいていらした新聞の記事を読んでいたところから、掲載が終わっても、浜先生のお話をききたいと思い、本誌の購読を始めました。インフルエンザにかかったとき、

★自分の体と向き合う

創刊号から拝読しております。2015 年のリニューアル後は専門性が増したように思います。素人なので難しい内容の時もあります。それでも、薬のこと、とりわけ自分の体のことへの向き合い方が変わりました。今後も貴誌に期待しています。（埼玉県：事務職）

母って何だろう

「絶縁家族　終焉のとき」（橘さつき著、さくら舎）を読んだ。八つの、絶縁した家族の物語が収められている。著者自身が実家から絶縁されているが「自分の家族のことを書くのは母が不帰の人となってから」と決めて、出版を急ぐ気持ちはなかったそうだ。しかし、さまざまな絶縁家族と出会ううちに、同じような境遇で悩み苦しんでいる人に何かの助けになるのではと考え、刊行に至ったという。

p76

次号予告

薬のチェック 102号は

SGLT-2 阻害剤
と
使ってはいけないクスリ③
ほか

編集後記

★前号、今号の 2022 年版「使ってはいけないクスリ」の特集はいかがだったでしょう？★不要な、というより有害な物質(薬とは呼べない)があまりにも多いことに驚かれると思う。新しい薬剤の中には、まだ本誌で検討ができていないものも多く、このリストは今後増える可能性があることを明言しておこう。したがって、数年に一回このような特集が必要になるだろう★本稿執筆時点(4 月 11 日)で、COVID-19 は、第 6 波が収まらないうちに第 7 波が立ち上がりつつある。ワクチンに関しては、本誌がしばしば取り上げているように問題が多いし、内服のモルヌピラビルも、前号で取り上げたように、大いに問題がある★地道に検査→隔離→酸素投与などの支持療法を続けながら、ウイルスが変異を繰り返し、弱毒化するのを待つのが、最善の策かもしれない★本誌創刊の 2001 年は 9.11 同時多発テロの年である。100 号発刊の今年は、ロシアのウクライナ侵攻の年として記憶されるだろう。一日も早い停戦を祈っている。(き)